



Nissan Blue Citizenship Stories 2012

「人々の生活を豊かに」の実現に向けて

NISSAN



- 2 | はじめに
- 3 | CEOメッセージ

日産が考えるブルーシチズンシップとは？

- 4 | 「人々の生活を豊かに」の実現に向けて

「人々の生活を豊かに」ってどういうこと？

- 6 | サステナビリティ
- 8 | モビリティ
- 10 | コミュニティ

社会の期待に応えていくために

- 12 | 日産は“電気自動車のある生活”を通して豊かな社会の構築をリードしていきます
- 14 | ブルーシチズンシップトピックス
- 15 | ルノー・日産アライアンス
会社概要

持続可能な社会の実現を目指して

地球温暖化問題や貧困、社会的な課題……今、社会はさまざまな問題に直面しています。私たちは、こうした問題を一歩ずつでも解決しながら、一人ひとりの日常をより良いものと感じることができるよう、将来世代に引き継いでいかなければなりません。そのためには社会全体が力を合わせていく必要があります。

日産は「人々の生活を豊かに」というビジョンを掲げ、新しい製品やサービス、そして新しいクルマ社会を皆さまに提供していますが、それらを次の世代も実感できるようにすることも大切な企業活動だと考えています。ブルーシチズンシップは、企業ビジョンを実現するための、私たち日産の決意です。日産はお客さま、株主、従業員、地域社会を大切に思い、将来にわたって価値ある持続可能なモビリティの提供に努めます。事業を通じて経済貢献すると同時に、社会の一員として、持続可能な社会の実現を目指します。

日産は、CSR 推進の取り組みを「サステナビリティレポート」という形で、毎年公表しています。ウェブサイトに掲載していますので、ぜひお読みください。
<http://www.nissan-global.com/JP/COMPANY/CSR/LIBRARY/SR/2011/>



ブルーシチズンシップ 「人々の生活を豊かに」それが日産の決意です

世界をリードする自動車メーカーとして、日産には事業活動を通じてステークホルダーの皆さまに最大限の価値を提供していくという社会的責任があります。私たちの事業活動は、持続可能なモビリティ社会の実現に貢献するものであり、環境、安全、社会を柱とする「ブルーシチズンシップ」は、まさしくその実現に向けた日産の取り組みを表しています。

私たち日産は、すべての人にモビリティを提供すると同時に、自動車産業が環境に与える影響を低減していくことを目指しています。そのために、より安全でエネルギー効率の高いクルマをお客さまにお届けし、世界各地で雇用を創出し、さらには人々が現在、そして将来にわたって直面する課題の解決につながるソリューションの提供に努めていきます。

グローバル企業である日産は、こうした課題に対してグローバル規模で取り組んでおり、ブルーシチズンシップはその活動を包括的に支える基盤となるものです。「人々の生活を豊かに」という企業ビジョンの実現に向け、日産は今後もまい進していきます。

日産自動車株式会社
社長兼最高経営責任者（CEO）
カルロス ゴーン

A handwritten signature in black ink, reading "Carlos Ghosn", with a long horizontal line extending from the end of the signature.

日産が考えるブルーシチズンシップとは？

「人々の生活を豊かに」の 実現に向けて

日産自動車株式会社
最高執行責任者 (COO)
志賀 俊之



モビリティ



安心できる モビリティ社会の実現

世界中のお客さまに、魅力溢れる、
安全で信頼性の高い手ごろな
モビリティをご提供することに
取り組んでいます。



サステナビリティ

社会および事業の持続可能性
持続可能な事業の成長と、
環境負荷の低減に
集中的に取り組んでいます。



コミュニティ

広く社会への貢献
広く社会に貢献し、
私たちが事業を行う
地域社会を支援する取り組みです。

持続可能な社会を次世代へ

日産は、「人々の生活を豊かに」という企業ビジョンを掲げています。乗って楽しい高品質なクルマをお客さまにお届けし、皆さまにより快適で便利な生活を提供することこそが、日産という企業が存在している意義です。一方で、クルマという乗り物に、そしてクルマがもたらす快適な生活に将来への持続性がないとしたら、どうなるでしょうか。

クルマは人々の暮らしの利便性を高めてきましたが、地球環境に与えてきた影響も少なくありません。また、残念ながら人々の生命や安全を脅かすような事故が起きていることも事実です。

私たちには、クルマやサービスを提供するだけでなく、クルマという乗り物が抱えている課題を解決する社会的責任があります。クルマがもたら

す豊かな生活を、私たちの次の世代、もっと先の世代まで伝えていけるように取り組んでいくことが重要なのです。

ブルーシチズンシップとは…

企業は、お客さま、株主、従業員、ビジネスパートナーそして地域社会といった幅広いステークホルダーに支えられて活動しています。従って、社会の一員として担うべき役割を果たし、社会とともに発展していかなければなりません。日産もグローバル企業として社会から何を求められているのかを常に意識しながら、自動車メーカーとして力を入れるべき8つの分野を策定し、重点的に企業のCSR活動を行ってきました。8つの分野はいずれも私たちが社会から信頼され、必要とされる企業であるために欠かすことのできない要素です。企業として当たり前のように実施している活動もありますが、日産だからこそできる活動もあります。それらは以下の3つの要素です。

環境の取り組みを中心とする「サステナビリティ＝社会および事業の持続可能性」では、日産のクルマや企業活動を通して排出される二酸化炭素を、地球が吸収できるレベルにまで抑えることを目指していきます。

安全の取り組みを中心とする「モビリティ＝安心できるモビリティ社会の実現」では、クルマが人を守る技術を積極的に開発し、「死亡・重傷事故をゼロにする」という究極のゴールを目指しています。

「コミュニティ＝広く社会への貢献」では、自然災害などにより困難に直

面している人々やこれからの社会を担う次世代へのサポートなどを行っていきます。

持続可能な社会の実現に向けて、日産が果たすべき役割としてこの3つの要素を「ブルーシチズンシップ」と名付けました。

ブルーシチズンシップは日産という企業の人格

個人と同じように企業にも人格というものがあります。人が年齢を積み重ねるほどより多くの責任を果たし、信頼を得ていくのと同様に、私たちも社会から信頼される企業でありたいと願っています。ブルーシチズンシップはまさに日産の企業としての人格であり、社会的責任をしっかりと果たすことで信頼を高めていきます。

もちろん、私たちは経済活動として企業活動を行っています。その一方で、地域社会に根付く取り組みを行い、すべてのステークホルダーが誇りに感じてくれるような活動を継続することで、より良い社会を実現していきたいと考えています。

いまや世界人口は70億人に達し、経済もグローバルに発展し続けています。こうした背景から、企業が社会的責任を果たすことへの期待はますます大きくなっています。経済活動において、企業が競い合っているように、あらゆる企業が社会に対する取り組みを積極的に行うことで、社会全体における生活の質の向上につながります。日産はその一端を担うだけでなく、リーダーとして活動していきたいと考えています。

「人々の生活を豊かに」ってどういうこと？



サステナビリティ

美しい地球を守りながら クルマがある生活を提供し続けるために

私たち日産の環境理念は「人とクルマと自然の共生」です。

CO₂排出量や資源利用に制約がある中、環境問題に積極的に取り組み、

環境への影響をできるだけ少なくしながら

持続可能なモビリティ社会をつくることは日産の使命。

そのための革新的なクルマを、そして新しいライフスタイルを提供していきます。



NISSANには、
エコカーの進化がそろっている

日産は100%電気で走るゼロ・エミッション車を開発し、普及させていく「ゼロ・エミッション」と、エンジン搭載車の燃費を向上させ、CO₂排出量の少ないクルマ「PURE DRIVE(ピュアドライブ)」の投入という2つに取り組んでいます。

環境に配慮したクルマづくり

私たちが求められているのは、運転して楽しいだけでなく、環境への負担が少ないクルマをつくること。日産は、2050年までに新車から排出されるCO₂を90%削減*するという長期ビジョンに沿って、環境技術の開発と商品の投入を進めています。中でも、走行中にCO₂や排出ガスを出さない電気自動車（EV）は、今、最も環境を考えたクルマのひとつ。日産は、EVを快適に使えるように環境を整備するなどして、CO₂の排出量をできるだけ少なくしていきます。

*2000年比

美しい地球を未来の子供たちへ

CO₂はクルマの走行中にだけ排出されるわけではありません。事業活動すべてにおいてCO₂削減に取り組むことや、限られた資源を大切にし、地球の生態系を維持することも企業の使命です。日産は、クルマの製造や輸送の過程でもCO₂排出量を低減するとともに、再生材の採用を増やすなど、資源を有効に活用していきます。そして、未来の子供たちのために青い地球を美しいまま残していきたいと考えています。

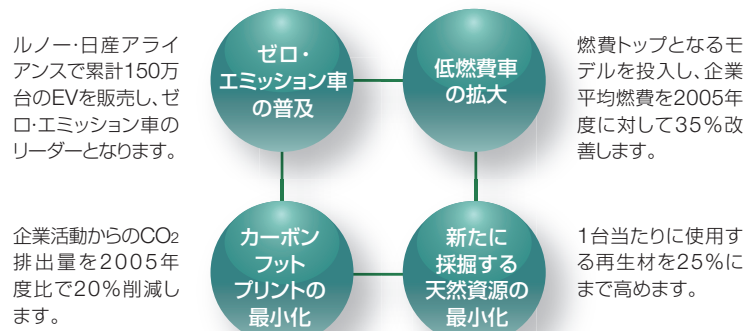
日産だからできること

環境負荷や資源利用を 地球が吸収できるレベルに抑えます

世界の人口増加や経済成長に伴い、エネルギーや天然資源の需要が急激に増加することが見込まれています。地球が人間の生活を支える能力（キャパシティ）が限られる中、経済活動と地球環境を両立させることは、私たち人類にとって大きな挑戦です。

日産が目指すゴールは、エネルギーや資源の利用効率を高め、また循環を促進させることで「企業活動やクルマのライフサイクル全体での環境負荷や資源利用を、自然が吸収できるレベルに抑えること」。2011年に発表した中期環境行動計画「ニッサン・グリーンプログラム2016（NGP2016）」では「ゼロ・エミッション車の普及」「低燃費車の拡大」「カーボンフットプリントの最小化」「新たに採掘する天然資源の最小化」を4つのキヤクシオンとして具体的な目標を設定し、その実現に向けて、グローバルに取り組んでいます。

NGP2016の4つのキヤクシオンは以下の通りです。



日産社員の決意

「日産リーフ」を運ぶ船も 環境に配慮したい

林 奈帆子（はやし・なほこ）

日産自動車SCM本部車両物流部。
完成車輸送に伴うCO₂管理と削減活動の
推進を担当。

完成車を輸送する際にはトレーラーや船、鉄道などを使いますが、そのどれもがCO₂を排出します。NGP2016では1台当たりの輸送に伴うCO₂排出量を低減することが目標。トレーラーの積載率を上げて使用台数を減らしたり、CO₂排出量の少ない海上や鉄道輸送を採用しながら、削減に努めています。

日産は、電気自動車で世界をけん引しているのですから、その輸送もエコフレンドリーでありたい。そこで2012年1月、省エネ型自動車運搬船「日王丸」による輸送を開始しました。本船は内航船舶では初となる太陽光発電パネルなどいくつもの省エネ装置を備えています。環境活動をけん引する日産自動車の新たな一歩となりました。

CO₂削減活動は海外拠点へも展開しており、現在、グローバル10拠点で輸送に伴うCO₂排出量管理が始まっています。将来的には工場の立地を考える際に、輸送におけるCO₂排出量も考慮する時代が来るかもしれません。その日のために、物流CO₂低減への意識を根付かせ、管理体系を構築することも重要な活動のひとつだと認識しています。

2012年1月に輸送を開始した「日王丸」。欧州でも2010年12月に「シティ オブ セントピーターズバーグ」が稼働し、物流のCO₂排出量の削減を実現している。



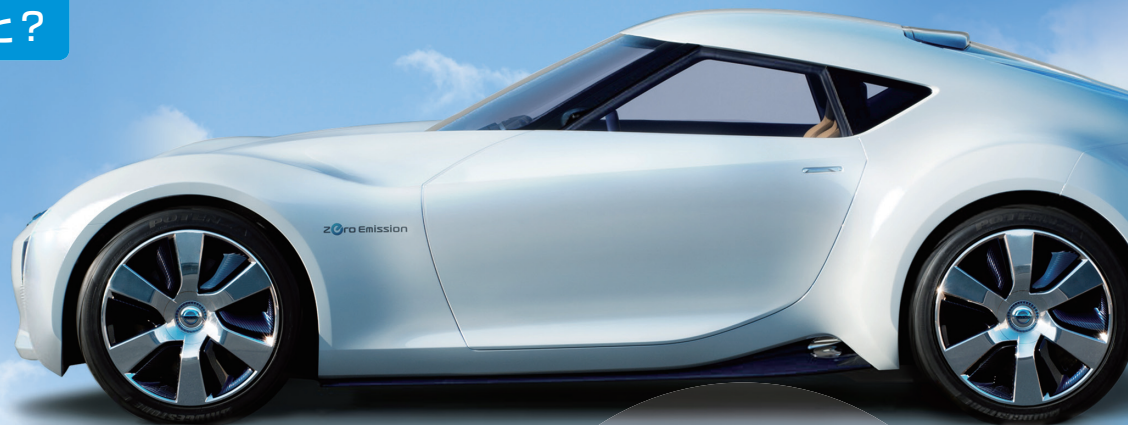
「人々の生活を豊かに」ってどういうこと？



モビリティ

乗って楽しいクルマが人を守る それが日産の安全への考え方

日産は“走る楽しさと豊かさ”を追求すると同時に、高い安全性とお客さまの安心を最優先に考えるクルマづくりを目指しています。日産車がかかわる死亡・重傷者数をゼロにすることを究極の目標として、安全技術を開発するだけでなく、お客さまとかかわるすべての場面で信頼と満足を提供したいと考えています。



日産先進衝突実験場では、数々の事故事例の分析に基づき、現実の世の中（リアルワールド）で起きているさまざまな事故により近い状況を再現しています。

日産車のかかわる死亡・重傷者数をゼロに

安全に対する日産の方針は、現実の世の中（リアルワールド）における安全性を追求すること。「リアルワールド・セーフティ」という考えに基づき、日産車がかかわる死亡・重傷者数を2015年までに1995年比で半減する目標を掲げています。すでに日本と英国においては2009年に達成し、現在は2020年までにさらに半減することを目指しています。

総合的な“品質”のリーダーに

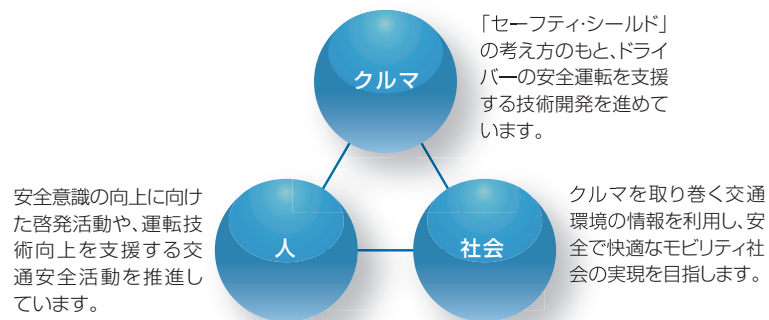
ショールームで実際に見て触って感じる肌触り、購入したときの使用感、製品そのものの品質、そして購入時や修理時の社員の対応……日産はお客さまとかかわるすべての場面で“品質”と考え、そのすべてにおいて、自動車業界のリーダーとなることを目指しています。また、不具合の発生ゼロを、もし不具合があった場合はできるだけ速く修理する体制を構築しています。

日産だからできること

真に安全なクルマ社会の実現に向けて 日産が取り組む総合的なアプローチ

交通事故の低減には、クルマだけでなく人や交通環境も含む総合的な取り組みが必要です。真に安全な社会の構築に貢献するため、日産は「クルマ」「人」「社会」という3つの階層に取り組む「トリプルレイヤーアプローチ」を推進しています。

このうち「クルマ」については、独自のコンセプト「セーフティ・シールド（クルマが人を守る）」を基本に、できるだけドライバーを危険に近づけないようにクルマが支援する技術開発を進めています。どんなに慎重に運転しても、ドライバーには“死角”があります。また、たとえ見えていても、判断を誤り思わぬリスクを招くこともあります。そうしたリスクの芽をあらかじめ察知し、ドライバーに危険を知らせ、緊急時にはシステムが介入して事故を未然に防ぐ。こうした機能を装備した「ぶつからないクルマ」が、日産の目指す全方位運転支援システムです。



日産社員の決意

ドライバーの「ついうっかり」を 確実に知らせたい

菅原 大輔（すがわら・だいすけ）

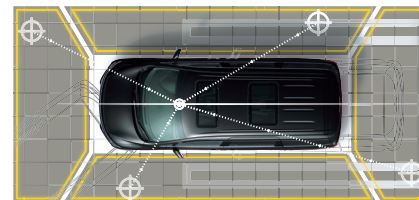
日産自動車電子技術開発本部IT&ITS開発部。
アラウンドビューモニターなどカメラを使った安全システムの開発を担当。



安全を確保するにはクルマ周辺の危険を素早く察知し、少しでも危険に近づけないようドライバーをサポートするシステムが重要。現在、リヤカメラを活用したマルチセンシングシステムを開発しています。車線変更の際に後方の死角にクルマがないか、車線変更するつもりがないのに車線を逸脱していないか、ギアをバックに入れた際に周辺に移動物がないか、この3つを警告音などで知らせるシステムです。

通常の運転行動を阻害しないよう、普通に運転しているときにはドライバーに煩わしさを感じさせない一方で、「ついうっかり」が発生しそうなときに確実にドライバーにお知らせできるようなバランスが大切。さまざまな走行環境を想定したテストドライブを繰り返して、テストドライブ後は一つひとつ部品を分解して不具合が発生しないことを確認します。そんな細部へのこだわりが日産らしさだと感じています。運転するときの“ワクワク”や“ドキドキ”を感じてもらうためにも、安全と安心を土台にしたクルマをつくるのが日産の使命です。

菅原さんが開発に携ったアラウンドビューモニターは、視認しにくい周囲の情報を映像で提供する画期的なシステム。狭い場所での駐車や見通しの悪い道などで、周囲を映像で確認できる。



「人々の生活を豊かに」ってどういうこと？



コミュニティ

すべての人が豊かさを実感できる そんな社会の実現に向けて

日産はグローバル社会の一員として、地球に暮らすすべての人がその豊かさを実感できるような社会の実現に向けて、自動車メーカーならではの社会貢献活動に取り組んでいます。従業員の参加意識を育てながら、NPO・NGOなどの外部組織とも連携し、各国・地域の実情やニーズに合わせた活動を行っています。



地域とともに日産らしい社会貢献を

世界各地には不幸にも大規模な自然災害に見舞われた地域があり、日々の生活に困窮している人々が多くいます。未来を担う子供たちや若者の心を育む活動も大切です。また、将来世代のために青く美しい地球の環境を守らなければなりません。

日産は、グローバルな考え方と各地域に最適な活動とのバランスをとりながら、日産らしい貢献ができるよう心がけています。

従業員やビジネスパートナーとともに

日産はグローバルに広がる事業所やグループ企業において、それぞれの国や地域の実情に配慮した社会貢献活動を展開しています。また、従業員一人ひとりの積極的な社会参加を促す仕組みも整えています。同時に、日産の社会貢献活動をより実りあるものとするために、NPO（非営利組織）やNGO（非政府組織）との対話を常に行い、連携したプログラムの可能性を探索しています。



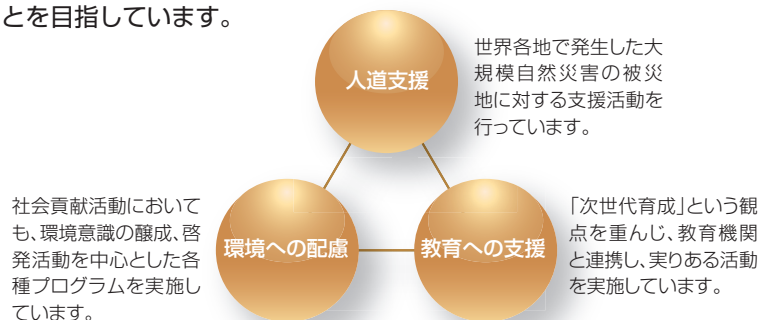
シャンティ国際ボランティア会は、東日本大震災によって大きな被害を受けた岩手県で移動図書館プロジェクトを実施。日産は「アトラスF24」を2台寄贈しました。

日産だからできること

日産が培ってきた財産を生かし、 3つの分野で社会貢献活動を展開

日産では、「人道支援」「教育への支援」「環境への配慮」の3つを柱に社会貢献活動を展開。「人道支援」では世界各地で発生した大規模自然災害の被災地に対する支援活動を行っています。また、日産は環境負荷削減に向けた取り組みを継続的に行っていますが、社会貢献においても、「環境への配慮」を重点分野と定め、環境意識の醸成、啓発活動を中心とした各種プログラムを実施しています。「教育への支援」においては次世代育成という観点を重んじて社会貢献活動を行っています。教育機関などとも連携しながら、実りある活動を継続的に実施しています。

このほか、地域への貢献にも力を入れています。地域社会の一員として、雇用の創出など経済的な貢献に加え、事業所周辺のゴミ拾いやイベントへの協力など、さまざまな活動を支援しています。金銭的な支援だけではなく、日産のノウハウや製品・関連施設の活用など、日産が本業で培った資源を十分に生かすことで、持続的な活動を行うことを目指しています。



日産社員の決意

日々の訓練で得た技術を 出張授業で後輩たちに伝える

三品 英則（みしな ひでのり）

日産自動車車両生産技術本部車体技術部。
技能五輪「メカトロニクス」部門金メダリスト。
現在、後輩たちの指導を担当。



技能五輪にメカトロニクスという種目があります。工場の生産ラインのミニチュア版ともいえる設備を組み立てて作動させる競技で、設備の立ち上げからトラブルシューティング、メンテナンスまでトータルな知識と技術を競います。入社以来3年間、あらゆる訓練を続けてきましたが、国際大会で金メダルを獲得し日産2連覇を達成した際には、支援を頂いた多くの方に恩返しできてホッとしました。

今までの人生で最も濃い時間でしたから、この体験を若い方々にも伝えられたらと母校で出張授業をする機会を頂きました。訓練中に実感した「高い目標に向かってチャレンジする」ことの大切さや習得した専門技術などを伝えることができ、後輩たちも、自分たちの学校から世界一が出たことを誇りに感じてくれているようでした。今後もモノづくりの魅力を多くの人に伝えていきたいと思います。そして、指導員を卒業し職場に配属されたら、この技術をグローバルに立地する日産の工場の現場で生かしたいと考えています。



2012年3月5日、母校・栃木県立県立産業技術専門校で開催された出張授業で、タイピングの実技を後輩たちに見せる三品さん。

社会の期待に応えていくために

日産は“電気自動車のある生活”を通して豊かな社会の構築をリードしていきます

日産のクルマづくりに対する情熱は「ゼロ」という言葉に凝縮されています。走行中に排出ガスを出さない電気自動車（EV）は、環境に与える影響が最も少ないクルマ。EV が世界中に普及すれば、私たちは美しい地球の環境を保ちながら、いつまでも“快適で便利なクルマのある生活”を楽しむことができます。

そのためには、高品質で安全な EV を開発・販売するのはもちろん、短い時間で充電できる設備を世界中に設置するなど、EV をもっと快適に利用するための基盤を整備しなければなりません。また、太陽光、風力、水力といった再生可能エネルギーの活用や、バッテリーをはじめとするすべての部品のリユース・リサイクルなど、さらに環境に優しいクルマにするためのシステムも必要になります。

私たち日産は自動車業界をリードし、各国政府や地方自治体、電力会社、企業、そして多くの専門家と協力しながら、世界中の人々が電気自動車を快適に利用できる社会の実現に向け、あらゆる取り組みや投資を行っています。

日産は国内約2,200の販売店のすべてに普通充電器を配備。急速充電器も2012年3月末現在で420店舗に設置しています。また2011年11月、新型の急速充電器の販売を開始。本体を約半分のサイズに小型化しました。

電気自動車普及に向けた
インフラ整備



世界各地で
パートナーシップを締結

日産は、EVの普及などを通じた環境への負荷が少ない社会の実現を目指し、アライアンスパートナーであるルノーとともに、100件を超える世界各国の政府や自治体、企業とのゼロ・エミッション車に関するパートナーシップを締結。グローバルで電気自動車の本格的普及に向けた基盤づくりを始めています。



100%電気自動車である「日産リーフ」は、走行中にCO₂などの排出ガスをまったく出さないだけではありません。アクセルを踏み込めば、スムーズかつ力強く加速。それでいてエンジンノイズがないので室内は静か……今まで味わえなかったドライブの楽しさを満喫できます。

**世界初の量産型
100%電気自動車
「日産リーフ」**



2012年北米国際自動車ショーでは、多目的商用バン「NV200」（日本名：NV200 バネット）をベースとした100%電気自動車「e-NV200」コンセプトを初公開しました。このコンセプトモデルは、ビジネスユーザーやファミリー向けに、フレキシブルでゆったりとした室内空間を実現。近未来の電気自動車量産モデルを提案しています。

**電気自動車「e-NV200」
コンセプト**



現在、日本では高齢者や単身者世帯が増加し、クルマを近距離移動に利用したり、少人数乗車で利用するケースが増えています。日産が提案する100%電気自動車「NISSAN New Mobility Concept」は、前後2人乗りのコンパクトなボディで、必要な駐車スペースは通常の約半分。電車など他の公共機関と組み合わせることでアクセスが向上するなど、大きな可能性を秘めています。

**電気自動車のある
新しい生活を提案**



Zero Emission



**バッテリーを
再生可能エネルギーの
蓄電池に**



**電気自動車の新しい活用を
提案する「LEAF to Home」**

「日産リーフ」に搭載しているリチウムイオンバッテリーに蓄電した電力を一般住宅へ供給するシステムを実現。夜間に貯めた電気を日中に使用することで、電力のピークシフトに貢献するだけでなく、万一停電や電力不足が発生したときのバックアップ電源として活用できます。24kWhのバッテリーは満充電時に一般家庭の約2日分の日常使用電力を賄うことができます。



日産が開発した高性能で大容量のリチウムイオンバッテリーはEV用電源としての役目を終えた後も、定置用の蓄電池として二次利用することができます。

現在日産では、太陽光発電と「日産リーフ」のリチウムイオンバッテリーを組み合わせた電気自動車用充電システムを開発し、日産自動車のグローバル本社で実証実験を開始しています。



ブルーシチズンシップを通じて、社会からの期待に応えていきます

企業が社会的責任を果たすことへの期待が高まる中、“日産だからできる”活動で、社会からの期待に応えていきたい。

日産は、人々の今と未来に貢献するさまざまな活動を展開しています。そんなブルーシチズンシップに関する活動をいくつか紹介します。

誰もが快適に移動できるクルマを

日産には、幅広い乗客の方にご利用いただけるクルマがあります。「NV200バネットタクシー」はお子さまや高齢者、車いすをご利用の方などの使いやすさを追究。公共交通のバリアフリー化を目指した「みんなのタクシー」です。国土交通省の「標準仕様ユニバーサルデザインタクシー」第1号に認定されたほか、ドイツでは「ユニバーサルデザイン賞」などを自動車業界で初めて受賞。「NV200」はニューヨーク市の次世代タクシーにも選ばれ、2013年後半から導入されます。



日産の“モノづくりDNA”を世界へ

成長著しいアジアをはじめ、世界各地で自動車市場が拡大する現在、日産のクルマづくりもグローバルに進化しています。「グローバルトレーニングプログラム」は各拠点の生産性と開発力を高めるための人財育成プログラム。2011年11月から、インド、タイ、中国の開発拠点において、1,300名以上の若手技術者が受講しています。日産の“モノづくりDNA”をグローバルに伝承することで、現地のニーズに合った商品を高品質・高均質にお届けすることを目指しています。



発電もゼロ・エミッションに

日産のゼロ・エミッションの取り組みはクルマの走行だけに限りません。電気自動車に搭載される高性能リチウムイオンバッテリーを使って再生可能エネルギーを貯蔵すれば、発電時の排出ガスゼロも実現できます。日産では、横浜のグローバル本社に設置した太陽光パネルで発電した電力を、「日産リーフ」4台分のリチウムイオンバッテリーで構成する蓄電装置に蓄え、EVの充電に利用する実証実験を開始。年間で「日産リーフ」約1,800台分の電力供給を可能にしています。



ルノー・日産アライアンスがもたらす大きな価値



ルノー・日産アライアンスは、パリに本社を置くルノーと横浜に本社を置く日産の戦略的パートナーシップであり、アライアンスのクルマは世界で販売されるクルマの10台に1台を占めています。1999年にパートナーとなった両社の2011年の販売台数は、ロシアのアフトヴァズ社の台数も含めると803万台となります。12年前の創設以来、アライアンスは大きく成長しており、特に新興市場へ大きく拡大しています。


MORE
INFO

ルノーと日産のアライアンスについてさらに詳しく知りたい方は、
<http://www.nissan-global.com/JP/COMPANY/PROFILE/ALLIANCE/RENAULT01/> をご覧ください。

2012年3月現在

会社名	日産自動車株式会社 (NISSAN MOTOR CO., LTD.)
社長兼最高経営責任者 (CEO)	Carlos Ghosn (カルロス ゴーン)
本店所在地	〒220-8623 神奈川県横浜市神奈川区宝町2番地
本社所在地	〒220-8686 神奈川県横浜市西区高島一丁目1番1号 電話 045-523-5523 (代表)
設立	1933 (昭和8) 年12月26日
資本金	6,058億13百万円
主な事業	自動車、船舶の製造、販売および関連事業
株式	<div> <div> 授権株数 6,000,000,000株 </div> <div> 発行済株式総数 4,520,715,112株 </div> <div> 株主総数 265,168人 </div> </div>
従業員数	<div> 24,240人 (単独ベース) </div> <div> 157,365人 (連結ベース) </div>

MORE
INFO

日産の会社情報についてさらに詳しく知りたい方は、
<http://www.nissan-global.com/JP/COMPANY/> をご覧ください。



2012年6月発行